高校生のいる家庭において動物飼育が家族機能に与える影響

金子　敏之・山口　一

キーワード：動物飼育　家族機能　コミュニケーション

抄録：近年，多くの動物が飼育されるようになり，人と動物の関係がもたらす効果について研究が行われてきた。その結果，動物と関わりを持つことで抑うつが低下したとする研究（飯田ら，2008）や飼育動物が仲介役になり，家族間の対立を抑えられ家族がよい雰囲気になったという報告（Bridger，1976）など，飼育者のみではなく家族機能に肯定的な効果を示す報告もされている。

また，高校生の時期は，家族中心の人間関係から友人中心の人間関係へと移り変わる時期であり，これまでとは異なった家族関係へと変化する。そのため，高校生の時期にいる子どもへ家族が与える影響は大きいと考えられる。

以上のことから，本調査では高校生（男性83名，女性138名）を対象に，動物飼育と家族機能との関係を調査した。

調査の結果，FACESKG Ⅳ－16（Ver3）のきずな因子では男性と比べ女性の方がきずな高群の人数が有意に多く低群の人数が少なかった。コミュニケーション尺度では女性の方が高得点だった。動物飼育の有無とFACESKG Ⅳ－16（Ver3）の関係では，女性のきずな因子において，動物飼育群の方が家族のきずなが中程度であり，機能的なレベルにあることが確認された。また男性では，飼育群のほうが，有意に父母距離が近く，家族の凝集性が高い可能性が示唆された。一方，動物飼育の有無とコミュニケーション尺度の関係は見られなかった。コミュニケーション尺度は家族の言語的コミュニケーションの程度を尋ねる質問で構成されており，動物飼育は，家族の言語的なコミュニケーションを増やす効果を通じてではなく，共に世話をするなどの時間を共有する機会が増えたり，同じ動物を飼っているための連帯感が生まれたりするなどの非言語的なレベルの要因を通じて家族が適切なきずなを保っていると考えられた。

以上から，男女共に動物飼育群の方が家族間のきずなが健康的なレベルであることが推測され，特に女性において明確であった。動物飼育による影響に性差が見られた要因としては，調査対象者が高校生という時期であり，性別による対人関係の違いが表れる時期である事が考えられる。

I. 序論

近年，様々な種類の多くの動物がペットとして飼育されるようになった。それに伴い，人と動物との関係の中で生じる身体的，精神的健康への肯定的な影響についての関心も高まってき

ている。

人と動物とのつながりが肯定的な効果をもたらすということは古くから言われてきたが，より注目されるようになったきっかけはLevinson（1962）が犬は治療者と患者との間に，リラックスできて，患者が脅威を感じない関係をつくる助けになると報告した事による。その後，人と動物の関係がもたらす様々な効果についての研究が行われ，動物との関わりを持つことで抑うつが低下したこと（飯田ら，2008）や飼育動物が仲介役になり，家族間の対立を抑えられ家族がよい雰囲気になったこと（Bridger, 1976）などが報告されている。その結果をまとめると，人と動物の関係による効果には①生理的効果，②心理的効果，③社会的効果の3つの効果があることがわかってきた（横山，1996）。

以上のように，飼育動物に関する研究がなされる中で，ペットが青少年期の心性に与える影響に関しても様々な研究が行われている。

例えば，森定（1999）の大学生を対象とした研究がある。この研究では，一緒にいたり触れたりすると不安が薄れる，落ち着く，落ち込んでいるときにきてくれると嬉しい，といった第二次移行対象の役割をペットが担っていることが明らかにされた。

しかし，飼育動物との関係における研究の報告は，肯定的なものばかりではない。例として，金児（2006）のペット飼育が飼い主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響について調べた研究が挙げられる。この研究ではペットへの愛着が強い飼い主ほど主観的幸福感は低いことが示されている。

ところで，高校生の時期は，身体的，精神的，社会的な側面で大きな変化が起きる時期である。身体的な側面においては第2次性徴を迎えることにより，男女ともに性的な特徴がはっきりとしてくる。精神的な側面としては友人関係や異性との関係，人生観や価値観といった様々な問題に直面することにより，次第に自分自身のアイデンティティを形成していく。社会的な側面としては，これまでの家族中心の人間関係から友人中心の人間関係へと移り変わる時期である。しかし，関係が家族中心から友人中心へ移行するからといって，家族が発達的に重要でなくなったということを意味するのではなく，家族との外的な関係と内的な関係の両側面からの再交渉を行い，これまでとは異なった形の家族関係へと変化する。そのため，親子関係の再交渉，再構築が行われる時期の子どもへ家族が与える影響は大きいと考えられる。

家族関係を考える時の1つの方法としてOlson（1990）が開発した円環モデルの考え方がある。Olsonの開発した円環モデルでは，家族機能を凝集性，適応性，コミュニケーションの3次元から考える。凝集性とは家族メンバーが互いに持つ情緒的なつながりの事であり，主に，情緒的な結びつき，家族成員間におけるお互いの関与の程度といった下位項目により構成されている。適応性とは家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力であり，主に，リーダーシップ，規律，役割関係，規則といった下位項目より構成される。凝集性，適応性どちらの次元も極端に高くても低くても家族機能は上手く働かず，中間のレベルの時に家族機能は適切に働くと考えられている。そして，コミュニケーションの次元は，凝集性と適応性の2次元が上手く機能するように促進的な働きを持つとされている（草田，1995）。

Ⅱ. 目的

本研究では，動物を飼育することが家族機能に与える影響について調査する。

序論で挙げたように，動物が人に与える肯定的な影響の報告の他に，効果がない，もしくは否定的な効果が報告されている。その要因として，人々の動物に対する認識が以前と比べ変化してきていることが考えられる。また，家族の中で動物がどのような働きをするのかを調査した日本の研究，特に高等学校に通う時期にある子供に関する研究はほとんど見られなかった。

以上から，本調査では，高校生を対象に，動物を飼育している群の方が飼育していない群よりも，コミュニケーションが増え，家族間距離が縮まり，家族機能の一種である家族の凝集性，適応性共に健康的なレベルになるのかを調査した。

Ⅲ. 方法

1　対象

本調査は，A県にある公立の普通科高等学校3校に通う男女257名を対象とした。

2　実施期間

2010年7月～ 2010年10月の間に各校1回ずつ実施した。

3　手続き

調査は，調査実施者が調査対象校に出向き，その教員および学校長の同意を得た上で，別の機会に調査実施者が授業時間外に生徒に対して本調査の説明を行った。その際，倫理上の問題について生徒に説明を行った。対象の生徒に調査票を配布し，生徒が同意した場合，返信用封筒に調査用紙を入れて返送してもらった。また，説明後すぐ回答が終わった生徒の調査用紙は，その場で回収した。本研究は桜美林大学の研究倫理委員会の審査を受け承認されている。

4　質問紙構成

①　フェイスシート

調査への同意・対象者の性別・年齢・家族構成・動物飼育の有無（飼育の場合は飼育動物の種類と数，飼育期間，主な飼育者，1日に関わる時間）・過去の動物飼育の有無（飼育していた場合は飼育動物の種類と数，飼育期間，主な飼育者，1日に関わっていた時間）を尋ねた。

②　Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansei Gakuin Ⅳ－16（Version3）（以下，FACESKG Ⅳ－16（Ver3）とする）

FACESKG Ⅳ－16（Ver3）は，Olson（1990）が開発した円環モデルの家族メンバーが互いに持つ情緒的なつながりを示す凝集性と家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力である適応性の概念をもとにして立木の指導のもと，石川（1988）が開発したFACESKGを立木（2009）がさらに改良し，開発した尺度である。なお，石川はFACESKG Ⅳ－16（Ver3）において，凝集性を「きずな」，適応性を「かじとり」と記載している。本研究でも同じ尺度を使用するため，同様に「きずな」，「かじとり」という用語を使用することとする。また，本尺度は合計点が－2点以上2点以下を家族機能が適切に働くレベル，－2点未満もしくは2点よ

り高い得点では家族機能は上手く働かないとされている。そこで，今回の調査では，健康的な家族機能であるかを調べる事を目的としているため，「きずな」と「かじとり」の両次元共に，-2点未満を低群，-2点以上2点未満を中群，2点以上を高群と分類し調査に用いた。

③　コミュニケーション尺度

家族間コミュニケーションを尋ねる尺度はコミュニケーション尺度（黒川, 1990）の第1因子を用いた。第1因子は「率直な家族のコミュニケーション」を測定する因子である。

④　家族関係単純図式投影法

家族関係単純図式投影法とは，水島（1978）の開発した図式的投影法である。家族関係単純図式投影法では，直径12㎝の円を用紙に描き，その円を家族の枠として，1円玉大の大きさの駒を家族成員として家族関係を表現させるものである。本調査では，配置された駒間の中心から中心まで距離を測定し，家族間の親密さを測定する尺度として用いた。

Ⅳ. 結果

1　回収率と回答者の基本属性

回収された調査票は224（回収率は87.2％）であった。その中から，回答に不備があり，調査に用いる事が出来なかった3票を除いた221の調査票を分析対象とした（有効回答率98.7％）。

回答者は15歳から18歳であり，高校1年生から3年生であった。有効回答の内，男性は83名（37.3％），女性は138名（62.7％）であった。

動物の飼育形態を見てみると，これまでに飼育したことのない「飼育なし」が50名（22.6％），過去に飼育した経験はないが，現在は動物を飼育している「現在飼育」が55名（24.9％），過去に飼育した経験はあるが，今現在は飼育していない「過去飼育」が43名（19.5％），過去に飼育経験があり，現在も動物を飼育している「現在，過去飼育」が73名（33.0％）であった。

現在飼育されている動物と過去に飼育されていた動物の種類を表1に示す。

表1　現在飼育動物の種類別の人数

分類	種類	度数（現在飼育）	度数（過去飼育）
犬	犬	90（40.7）	48（21.7）
その他哺乳類	猫	28（12.7）	13（5.9）
	ハムスター	7（3.2）	34（15.4）
	ウサギ	4（1.8）	4（1.8）
	リス	0（0.0）	2（0.9）
	コウモリ	0（0.0）	1（0.5）
その他	魚類	19（8.6）	20（9.0）
	鳥類	4（1.8）	7（3.2）
	爬虫類	3（1.4）	7（3.2）
	その他	4（1.8）	5（2.3）

（　）内は％

今回の調査では，犬以外の飼育動物の数が少ないことから，猫とその他哺乳類を「その他哺乳類」，魚類と爬虫類，鳥類，その他を「その他」とまとめて分析に用いた。また，飼育動物の種類は複数回答が可能なため重複している場合には，「犬」「その他哺乳類」「その他」の順に優先順位を設け，飼育している動物の中で，より順位の高い飼育動物の群に分類した。

現在飼育動物と過去飼育動物に性差があるか調べるために，性別と「現在飼育なし」「犬」「その他哺乳類」「その他」の2×4のカイ二乗検定を行った。その結果，過去飼育動物において，有意差が見られた（χ^2=10.896，df = 3，p<.05）。そこで，残差分析を行ったところ，「過去飼育なし」の群では女性よりも男性のほうが有意に人数が多く，「犬」飼育群では男性よりも女性のほうが有意に人数が多かった（表2）。

表２　男女別の過去飼育動物の種類別人数数

	男	女	合計
犬	11（−2.4）	37（2.4）	48
その他哺乳類	12（−1.3）	30（1.3）	42
その他	9（−0.2）	16（0.2）	25
なし	51（3.1）	55（−3.1）	106
合計	83	138	221

（　）内は調整済み残差

2　各尺度の検討

①　FACESKG Ⅳ − 16（Ver3）

FACESKG Ⅳ − 16（Ver3）の各因子における3群の人数に性差があるかを2×3のカイ2乗検定によって調べた。その結果，きずなでのみ有意差が見られた（χ^2=12.515，df = 2，p<.05）。そこで，きずなにおいて残差分析の結果，男性のきずなが低い群と女性のきずなが高い群は有意に多く，男性のきずなが高い群と女性のきずなが低い群は有意に低かった（表3）。

表３　性別ときずなのクロス表

	きずな		
	低	中	高
男性	19（2.6）	52（0.8）	12（−3.0）
女性	14（−2.6）	79（−0.8）	45（3.0）

（　）内は調整済み残差

②　コミュニケーション尺度

コミュニケーション尺度を構成する因子を確認するため，主成分分析を行った結果，第1主成分の固有値が5.58であり，寄与率が55.8％となっていた。また第2主成分の固有値は0.84と低いことや共通性もすべての項目で0.5以上となっていることから，コミュニケーション尺度は全10項目で1因子構造として扱うことが妥当であることを確認した。以下に，各項目の主

表４　コミュニケーション尺度の成分行列

	Ⅰ	共通性
4．親と話をすることに満足している	.81	.65
9．家庭の問題を親と気軽に話し合える	.80	.64
2．親は，いつもよく話を聞いてくれる	.80	.63
3．親は聞かなくても私の気持ちを知っている	.76	.58
5．心配事があったら，私は親に言う	.74	.55
8．親は私のものの見方を理解しようとする	.73	.53
1．何のためらいもなく，親と話し合える	.72	.52
10. 親に自分の気持ちを気軽に表現できる	.71	.50
6．親に愛情を率直に示す	.70	.50
7．質問すると親は素直にこたえてくれる	.70	.49
寄与率	55.8％	

（　）内は調整済み残差

成分負荷量を示す（表4）。

因子内の信頼性を確認するためCronbachのα係数を算出したところα＝.910であり，高い内的一貫性が確認された。

また，コミュニケーション尺度得点の男女別平均は男性29.2（7.6），女性32.6（8.8）となっていた（（　）内は標準偏差）。そこで，性差を調べるためにt検定を行った結果，女性の方が男性よりも有意に得点が高かった（t（219）＝－2.935，p<.05）。

③　家族関係単純図式投映法

家族関係単純図式投映法では，自分から父までの距離（以下，父子距離），自分から母までの距離（以下，母子距離），父子距離と母子距離を平均した距離（以下，親子距離），父と母の間の距離（以下父母距離），自分とペットの距離（以下，子ペット距離）の5つの距離を扱う。

また，家族関係単純図式投映法における距離は，実数のままでは正規分布しないため，常用対数に変換した。その結果，正規分布に近い分布が確認できたため，今調査では駒間の距離を常用対数に変換し使用することとした。以下に，各距離の平均と標準偏差（表5）を示す。

各距離の平均に性差があるのかを調べるためにt検定を行ったところ，母子距離において有意差（t（211）=2.079，p<.05）が見られ，女性の方が男性よりも距離が近かった。

表５　家族関係単純図式投影法で表された各距離の平均と標準偏差

	度数	距離平均	対数平均	標準偏差
父子距離	206	40.82	1.58	.17
母子距離	213	35.62	1.52	.16
親子間距離	204	38.18	1.56	.14
父母距離	204	34.94	1.50	.18
子ペット距離	117	34.76	1.50	.18

距離平均はmm

3　動物飼育の有無と家族機能との関係の検討

①　動物飼育とコミュニケーション尺度との関係

コミュニケーション尺度を現在飼育の有無と性別を含めた二要因の分散分析を行った結果，性別と現在飼育の有無の交互作用に有意差は見られなかった（F（1,216)=0.008，ns）。また，現在動物を飼育しているか否かによる主効果も見られなかった（F(1,216)=0.030，ns）。

②　動物飼育と凝集性，適応性との関係

現在飼育動物の有無とFACESKGⅣ－16（Ver3）の2因子の高中低の割合が異なるかをカイ2乗検定により調べた。その結果，きずなにおいてのみ有意差が見られた（χ^2=7.007，df＝2，p<.05）。FACESKGⅣ－16（Ver3）のきずな因子は，男女で差があることから，男女別に現在飼育の有無によりきずな因子の3群に差があるのかをカイ2乗検定によって調べた。その結果，女性において有意な差が見られた（χ^2=6.408，df＝2，p<.05）。そこで，女性のきずな因子において残差分析を行ったところ，現在動物を飼育している群は飼育していない群に比べ，きず

な因子の中群の人数が有意に多くなり，低群が有意に少なくなっている。（表6）。

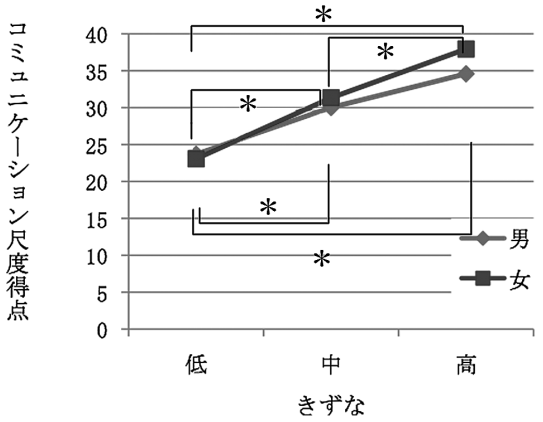
表６　男女別の現在飼育の有無ときずな因子のクロス表

		きずな		
		低	中	高
男性	現在飼育あり	8（−0.8）	29（1.2）	5（−0.7）
	現在飼育なし	11（0.8）	23（−1.2）	7（0.7）
女性	現在飼育あり	5（−2.2）	55（2.0）	26（−0.8）
	現在飼育なし	9（2.2）	24（−2.0）	19（0.8）

（　）内は調整済み残差

さらに，男女別にFACESKG Ⅳ－16（Ver3）の両因子を独立変数，コミュニケーション尺度を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果，男女共にきずな因子との間にのみ有意差が見られた（F（2,217）=37.493，p<.05）。そこで，きずな因子とコミュニケーション尺度の間でTukey法を用いた多重比較を行い，詳しく調べた。その結果，きずなの各群との間に有意差が見られ，きずなが高いほどコミュニケーション尺度の得点も高くなっていた（図1）。

図１　きずなの３群におけるコミュニケーション尺度の平均



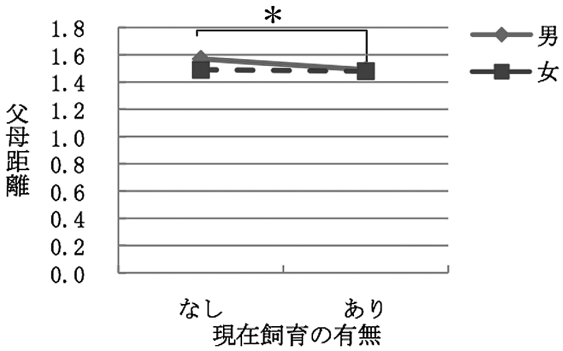
（＊：p<.05）

③　家族関係単純図式投映法から見られる結果

FACESKG Ⅳ－16（Ver3）と家族関係単純図式投映法の関係を見るためにFACESKG Ⅳ－16（Ver3）の両因子を独立変数，家族関係単純図式投映法で表された各距離を従属変数として一元配置の分散分析を行った。その結果，どの距離においても有意差は見られなかった。

次に，現在動物飼育の有無によって各距離に違いが見られるか調査した。母子距離と父母距

図２　男女別の現在飼育の有無における父母距離の平均



（＊：p<.05）

離においては性差が見られたため，すべての距離において現在飼育の有無と各距離に性別を含めた二要因の分散分析を行った。その結果，父母距離では，男性において，現在飼育していない群よりも飼育がある群のほうが有意に距離が近かった（男性：F（1,78）=4.414，p<.05 女性：F（1,124）=0.032，ns，図2）。

以上，FACESKG Ⅳ－16（Ver3）のきずな因子において，女性では動物飼育の有無による差が見られ，動物飼育群の方がきずなの中群の人数が有意に高いことが示された。また，FACESKG Ⅳ－16（Ver3）のきずな因子とコミュニケーション尺度得点の関係では，きずなが強いほどコミュニケーション尺度得点が高いという関係が見られた。

家族関係単純図式投影法に表された各距離と動物飼育の有無との関係では，男性において，飼育していない群よりも動物飼育群の方が有意に父母距離が近くなっており，家族関係単純図式投影法においても，男性でのみではあるが，動物を飼育している群のほうが飼育していない群よりも一部の家族の凝集性が高い可能性が示唆された。

Ⅴ．考察

1　基本属性と各尺度

FACESKG Ⅳ－16（Ver3）を見ると，きずなにおいて男性よりも女性の方がきずな高群の人数が有意に多く，低群が少ないといった性差が見られた。澤内（2006）の大学生を対象とした青年期における家族関係に関する調査でも，大学生が捉える家族関係のきずなにおいて，男性よりも女性の方が有意に高く，男性の方が女性よりも早い時期に家族よりも外界に目を向ける傾向が強いことが示唆されている。今回の調査でも，女性よりも男性の方が早い段階で家族以外の外界へと目を向けるため，自らが家族のきずなを意識する機会が減り，家族機能のきずなに性差が見られたと思われる。

次に，コミュニケーション尺度を見ると，主成分分析の結果，単一の成分として扱うことが妥当であった。この結果は，黒川（1990）の結果を支持するものである。また，女性の方がコミュニケーションの量が多いという結果も，黒川の「一貫して男子の方が否定的回答をしている」という結果と矛盾しない。この結果も，家族機能のきずなと同じように，女性の方が家族内でのコミュニケーションが密であり，逆に男性は，女性と比べて家庭よりも外の世界に目を向ける傾向が強いため家族間のコミュニケーションが少なくなると考えられる。

2　動物飼育の有無と家族機能との関係

動物飼育の有無ときずな因子の各群の人数の差を見ると，女性において現在動物を飼育している群では，きずな因子の中群の人数が有意に多くなり，低群が有意に少なくなっている。この事から，女性のきずな因子においては「現在動物を飼育している群のほうが家族機能が健康的になる」ということができる。FACESKG Ⅳ－16（Ver3）におけるかじとり因子とは，家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力の事である。そして，きずな因子とは，家族メンバーが互いに持つ情緒的なつながりの事である。動物を飼育しようとする場合，その飼育場所の確保や環境を整えるために労力や経費が必要となってくる。そして，その後も，エ

サ代や飼育環境の維持，飼育動物の健康維持のための経費や労力は必要不可欠である。以上の事をふまえると，家庭の中で動物を飼育するという事は，家族メンバー間の協力が必要となり，家族同士が関わる機会が増えるのではないかと予想できる。さらに，家族のメンバーにとって飼育動物が親しい存在となることにより，家族のメンバーが，飼育動物という接点を通してお互いが交流を持つことが可能になり，飼育動物が家族メンバーとの間をつなぐ「かけ橋」としての役割を担うため，飼育動物との関係が近い方が家族のきずなもより強く認知されるのではないかと推測される。以上の理由により，現在動物を飼育している群ではきずな因子の低群が少なくなり，中群の人数が多くなっていたと思われる。

また，女性においてのみ動物の飼育の有無ときずなとの関係が見られた。この理由を考えるにあたり，男女別にきずな因子の3群の人数の差を見ると，男性はきずなが低い群が多く，女性はきずなが高い群が多い事がわかる。この事から，男性は家族間でのきずなを感じる事が女性に比べ少ないことがわかる。さらに，澤内（2006）の大学生を対象として家族関係と精神的健康の関連について調査した研究では，性別による家族機能の捉え方が異なる事が示され，男性の方が，女性よりも早い時期に家族以外の外界に目を向け，家族機能を認知しにくい傾向にある事が示されている。以上の事から高校生の時期にいる男性にとって，家族以外の対人関係が重要になっていることが推測され，そのために，家庭で動物を飼育する事による家族のきずなへの影響が見られなかったと考えられる。また，残差分析の結果，動物飼育を行った群の方がある程度はきずな中群が多いので症例を増やしさらに調査を行っていくと有意な結果が出る可能性がある。

次に，きずな因子とコミュニケーション尺度との関係を見ると，家族のきずなが強いほど，コミュニケーションも多いという関係が見られる。この結果は，コミュニケーションは家族機能がうまく機能するように作用するというFACESの考え方を一部支持するものである。しかし，矢澤の研究（2005）において飼育動物が「家族間コミュニケーションの媒介者」である事が示唆されているにもかかわらず，動物飼育の有無とコミュニケーション尺度との関係は見られなかった。なぜこのような結果になったのかというと，コミュニケーション尺度と矢澤の使用した尺度の内容の相違が関連すると思われる。コミュニケーション尺度の内容は，「5　心配事があったら，私は親に言う」や「7　質問すると親は素直にこたえてくれる」のように，子どもが親に対して，直接的な言語的表現をすることが出来ているかを尋ねる質問項目が多い。それに対し，矢澤の研究で使用された質問項目は，「ペットは家族とのコミュニケーションに役立つ」というものであり，コミュニケーションの内容は尋ねていなく，言語的なコミュニケーションだけではなく，共に世話をするなどの非言語的なコミュニケーションをも含めて測定していると思われる。

以上から，動物の飼育がきずな因子に影響した要因としては，家族間で関わる機会が増えることにより言語的なコミュニケーションが増えるということよりは，共に世話をするなどの時間を共有する機会が増えたり，同じ動物を飼っているための連帯感が生まれたりするなどの非言語的な要因が関連していると思われる。また，上記の考察は，ペットが仲介役になることに

よって家族間の対立をある程度抑えることができることを示したBridger（1976）の研究と矛盾しない。

家族関係単純図式投影法と動物飼育との関係では，男性においてのみではあるが，父母距離は，動物飼育している群のほうが飼育していない群よりも近い事が示され，動物を飼育している群のほうが飼育していない群よりも家族の凝集性が高い可能性が示唆された。

Ⅵ　結論

本調査の仮説については，特に女性において，動物を飼育している群の方が飼育していない群よりも家族間のきずなが健康的なレベルであることが確認された。これは，動物を飼育することによる家族メンバー間の関わる機会の増加がきずなに肯定的な影響を与えていると考えられた。また，動物飼育による影響に性差が見られた要因としては，調査対象者が高校生という時期であり，性別による対人関係の違いが大きく表れる時期である事が要因として考えられた。また，動物を飼育する事と家族間のきずなの関係は，言語的コミュニケーションを媒介とする関係ではなく，非言語的な要因を媒介としてきずなと関連していると考えられる。このような結果が見られた理由の1つとして，共に世話をする事や飼育動物という言語コミュニケーション以外の関係を持つ「きっかけ」となり連帯感が強くなるためにきずなが強く感じられるようになると考えられる。しかし，本調査では具体的に，動物飼育することによるどのような要因が家族のきずなに影響を与えているのか不明であった。そのため，今後は，動物を飼育することにはどのような効果があるのかを全体的に捉え，動物が与える影響を，愛着のみではなく，より詳しい動物との関係から調べる必要があると思われる。

今後の課題として，本調査は高校生を対象としており，一般化することができるのかといった問題がある。また，結果として動物飼育が言語的コミュニケーションに影響せずに，家族のきずなに影響している事がわかったが，具体的な要因は不明であった。さらに，動物飼育が家族関係に影響しているものとして考察してきたが，本調査では明確な因果関係を示すことはできていない。そのため，今後もさらに調査を重ねる必要があると思われる。

謝辞

調査に協力して下さった高等学校の校長先生を初め教員の皆様，大変お忙しい中，御時間を割いていただき誠にありがとうございました。そして，実際に調査に参加していただいた，各高等学校の生徒の皆様，自らには何の利益も無い中，無償で協力していただき，ありがとうございました。

文献

Bridger, H.（1976）　The changing role of pets in society　Journal of Small Animal Practice　17 pp.1−8

飯田俊穂　熊谷一宏　細萱房枝　栗林春奈　松澤淑美　（2008）　学校不適応傾向の児童・生徒に対するアニマルセラピーの心理的効果についての分析　心身医学 48　pp. 945−954

Johnson, T. P.　Garrity, T. F.　Stallones, L.　(1992)　Psychometric evaluation of the Lexington

Attachment to Pets Scale (LAPS)　ANTHROZOOS　5　pp.160−175
金児恵　（2006）　コンパニオン・アニマルが飼い主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響　心理学研究　77　pp.1−9
黒川潤　（1990）　円環モデルにもとづく尺度（和訳版）の標準化の試み―家族満足度，親－青年期の子どものコミュニケーション，FACES Ⅲについて―　家族心理学研究　4　pp.71−82
Levinson，B.M.　(1962)　The dog as co-therapist　Mental Hygiene(46)　pp.59−65
水島恵一　（1978）　実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ―「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて―　文教大学紀要 12　pp.1−11
森定美也子　（1999）　乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在　心理臨床学研究 16　pp.582−591
Olson. D. H.（1990）　Family Circumprex Model: Theory，Assessment and Intervention　Journal of FamilyPsychology Special Issue　4　pp.55−64.（草田寿子　（1995）　日本語版FACES Ⅲの信頼性と妥当性の検討　カウンセリング研究　28　pp.154−162から間接引用）
澤内香扶里　（2006）　青年期における家族関係と精神的健康の関連　関西大学心理相談室紀要　8　pp.23−32
矢澤明子　（2007）　現代家族の特質とペットへの愛着との関係　立教大学教育学科研究年報　50　pp.113−157
横山章光　（1996）　アニマル・セラピーとは何か　日本放送出版協会